

気仙沼市立病院で ePanc テレカンファレンスを開催しました(2012/6/13)

場所：気仙沼市立病院（宮城県気仙沼市）、国内 6 か所（福岡、東京、京都、金沢、札幌、仙台）、米国 2 か所（アイダホ州ボイズ、ワシントン州シアトル）
 テーマ：気仙沼からのアップデート、膵臓外科のこれから

6月13日(水)(米国12日), 気仙沼市立病院において, Pancreas Internet Teleconference in collaboration with International Research Institute of Disaster Science and International Symposium on Pancreas Cancer 2012 (災害科学国際研究所・膵癌国際シンポジウム2012 共同膵臓国際テレカンファレンス)というタイトルで、日本国内7か所(気仙沼、仙台、福岡、東京、京都、金沢、札幌)の肝胆膵外科医と、アメリカ合衆国2か所(アイダホ州ボイズ、ワシントン州シアトル)の膵臓外科医を結んだテレカンファレンスが開催されました。お忙しい中ご協力いただいた気仙沼市立病院の安海清院長、大友浩志先生、総務課の畠山正浩さん、佐藤研さん、マルタク株式会社菅原大典さんに心から感謝申し上げます。

災害科学国際研究所からは、江川新一教授が参加し、被災地気仙沼の復旧・復興の様子と、わが国の膵癌診療の現況、膵疾患に対する手術治療の変遷、慢性膵炎に対する最新の手術治療法の紹介がなされました。米国から復興にはどれくらいの時間がかかるのか?と質問があり、完全な復興には長い月日がかかるが、離散した住民が戻ることが困難になるため、早急で地域のニーズにある再建が必要だと締めくくりました。気仙沼市立病院は医師不足、医療スタッフ不足に悩みながらも、被災地の中核として積極的な医療を行っており、すでに東北大学てんかん科と専用回線を用いた遠隔診療を行っています。また、今回のようなテレカンファレンスを行うことで、仙台はもとより国内・海外との距離感を縮めることが可能になります。遠隔地にいても、最先端の医学・医療を共有できることは若い臨床医にとっても魅力となり、被災地への医療支援となります。地域医療を支えてきた開業医の多くが閉院せざるを得ない状況もあり、気仙沼市立病院には早朝から患者さん達が列をつくり、駐車場にもなかなか入れない状況です。

カンファレンス後、総務課の畠山さんに案内していただいた気仙沼はとてもおだやかな好天で、海はどこまでも美しく広がっていました。海と切っても切り離すことのできない気仙沼に震災前以上の活気が戻り、住民が安心して暮らせる医療供給体制を築いていくことが求められています。



気仙沼市立病院の様子



東京のテレビ会議画面（右上が気仙沼）

文責：江川新一（災害医学研究部門）